
白と赤と黒

幸咲満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と赤と黒

【Zコード】

N5191M

【作者名】

幸咲満

【あらすじ】

仲のいい双子の兄妹。表面上で崩れはじめていた日常に気づかなかつたのは兄だけだった。気付かなかつた兄が罪なのか、気付いてしまつた妹が罪なのか。その答えは見つけられない。

武文には双子の妹がいた。妹の富は幼いころから武文にくついて離れず、武文はそんな妹が可愛くて仕方なかった。

二人が中学生にあがり、それでも仲の良いまま平和な日常がすぎていく中、少しづつ表面下で何かが壊れていくことに武文は気づかなかつた。

そんなある日のこと。

武文は「15歳になつたら富の願い事を聞いてあげる。」と、二人の15回目の誕生日が1週間後に迫つた日の夜に言つた。

唐突な言葉に富は夕飯を食べていた手を止めた。

「どんな願いでも聞いてあげるよ。」

「でもその日は武文の誕生日もあるよ?」

富は急な兄の発言に首をかしげた。

いつもなら富と同じように周りからもう側である武文があげる側に立ちたいと思つたのは、ここのこと何故か元気のない富にプレゼントをして喜ばせたいからだつた。

「武文は優しいからなんでも願い事聞いてくれそうだね。」

そう言つた富は眉を寄せて苦しそうな表情をした。そのとき武文はどうしてそんな顔をするのだろう、どうして最近元気がないのだろうとただただ不思議に思つだけだつた。

彼は物事を考えるのにまだ少しばかり子供だつたのだ。だから気付かなかつたのだ。

「願い事、考えておくね。」

富の静かな声が武文の耳に残つた。

誕生日が次の日に近づいた夕方。

武文は昼間とはうつて変わって静まり返つた学校にいた。委員会の仕事がようやく終わり、帰宅しようと下駄箱に向かつた。

怖いくらいに静かな校舎。

不思議なことに元気に駆け回る生徒の姿も、忙しそうに歩く教師の姿も見えなかつた。

まるでこの世界に自分が取り残され感じがした。外に出ると校庭が薄暗いオレンジ色に染まつていた。

静かだつた。

その中でふと武文は上からの視線を感じた。

屋上を見上げると見慣れた姿があつた。

振り向いた武文に気付いた富は白くて細い腕をひらひらと振つて見せた。それはいつもよりもずっと白くて、周りの夕暮れの色に染まることのない恐ろしい純白に感じられた。

富の左手には白い紙が見えて、その足元にはダンボールが置かれていた。それは何かの形に折られていて、武文は一生懸命目を凝らしてみたがはつきりとは見えない。

遠くからでもわかるのは彼女のいつもの笑顔で、ようやくわかつた左手にあるものは白い紙飛行機だつた。

わずかに富の口が動いた。

ごめんね

そんなふうに口が動いた気がした。空気を振動して小さな音は武文の耳に静かに入りこんだ。

それと同時に手から飛行機が飛び立つた。

1つの紙飛行機がふわりと夕方の風にのり、ふらふらと寄り道をしながら武文の方へと下降する。その光景があまりにも非日常すぎて、武文はぼつと突つ立つたまま瞬きするのも忘れて見つめていた。1つ目の飛行機が着地する前にダンボール箱がひっくり返されて、中に入っていたのだろう何十個もの紙飛行機が解き放たれた。いっせいに宙を舞うたくさんの紙飛行機は視界を遮つた。

白い世界で、ちらちらと時折夕暮れ色のグランドと校舎が見えるだけ。

そしてそのちらちらと紙飛行機が見える武文の視界に富が落ちていくのがうつった。

それはあまりにも一瞬のことでの確認することはできなかつたけれど、すべての紙飛行機が土の上に着地したとき、屋上には富の姿がなかつた。

あるいは空の段ボール箱だけだつた。

何が起つたのか、今の状況を把握しきれない武文は地面の白い紙飛行機の一つをとつてそれを広げた。

そこには見慣れた几帳面な文字が綺麗に並んでいた。

「今日は私がいなくなる日。

明日は私が生まれて15年目。

武文、好きだよ。」

武文は息をのみこんだ。

そして、また、別の紙飛行機を広げた。

「知つている。

私が武文を好きになつてはいけないこと。

だから、「

武文の紙飛行機を広げる動作が焦りを交えた。

「15歳になつたら私の願い事を聞いてくれるつて言つてた。

私の願いは武文と一緒になれること。」

武文は真つ白になつた頭に小さな文字を淡々と流し込んだ。

「我慢が出来ないくらい
これ以上隠せないくらい

あなたを好きになつてしまつた。」

愛の言葉を乗せた紙飛行機が武文の手によつて広げられる。

「あなたはやさしいから
私の願いをかなえてくれる。

でもそれは
してはいけないこと。」

武文は飛行機を拾いながら屋上の真下の花壇へ足を進めた。
「15歳になつてはいけない。」

ああ、俺はどうして気付かなかつたのだひつと武文の頭に黒いシミ
が広がつていく。

「好きだから、
あなたを守りたいから

私は14歳のままでいます」

白い紙飛行機が武文の心に少しずつ黒いシミをつけていく。

「好きだから」

「武文のことが好きだから」

よつやくたどり着いた花壇には富の小さな身体が横たわつていた。

武文は動くことない富の身体をじっと見つめた。

白い紙飛行機とは正反対の富の赤く染まつた身体は武文の目に焼き
ついた。

気付かなかつた。

武文は富の苦しそうな表情を思い出した。

気付かなかつた。

武文は富の身体を抱き寄せた。

「『めん。』

それは一生分の「『めん』」だった。

残つたのは面の赤い身体と、髪の言葉が並べられた沢山の白い紙飛行機と、武文の心の中の黒いシミだけだった。

(後書き)

それは救いようのない舌。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5191m/>

白と赤と黒

2010年10月28日07時17分発行